

# 万行寺報

Mangyoji Jihō

発行  
浄土真宗本願寺派 万行寺  
住職 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾461-1  
電話 0267-67-2460

2024(令和6)年

仏暦2567年

7月号

(第154号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



## 住職 法話

### 仏法は聴聞にきわまる

「ここからは、次の二句も含めて、信心を得て恵まれる五つのご利益の最後にあたる「諸仏称讃の益」になります。

「凡夫」とは、煩惱にとらわれていて愚かなものといった意味があります。つまり、いわゆる善悪も含めたどんなものであっても、阿彌陀仏(如来)の本願のいわれ(弘誓願)を聞いて信ずれば(聞信)、仏さまたち(諸仏)にほめたたえられる(称讃)というご利益です。

この中で、「聞信」とあるように、浄土真宗では、「聞

正信心仏偈に学ぶ  
一切善悪凡夫人  
聞信如来弘誓願  
一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば

「現代語訳」  
善人も悪人も、どのようないふであつても、阿彌陀仏の本願を信じれば

くこと」が大変重要になってきます。

本願寺第八代の蓮如上人が仰せになつた言葉をまとめ「蓮如上人御一代記聞書」には、

いかに不信なりとも、聴聞を心に入れまうさば、御慈悲にて候ふあひだ、信をうべきなり。ただ仏法は聴聞にきはまることなりと云々。

と、「聞くこと」の大切さをお示しになりました。現代語訳すると、

信心を得ていないものであつても、真剣にみ教えを聴聞すれば、仏のお慈悲によつて、信心を得ることが出来るのである。ただ仏法は聴聞するということに尽きるのであると、蓮如上人は仰せになりました。

となりませう。

「聴聞」とは、どちらの漢字も聞くことで、「聴」のほうはこちらから積極的聞くこととあります。重ねることとで仏法をよく聞くという意味で使われます。

「聞く耳を持たない」という言い方もあるように、「聞く」ということは大切なことです。確か、始めは「周りの意見を聞きながら」と言いながら、人気取りばかり求めてきて、今では周りが見えなくなつてしまひ、身動きできずに居座らざるをえないような政治家もいます。まず、聞く耳を持ちながら進めていくことがトップには必要なのでしよう。

蓮如上人が、「仏法は聴聞にきわまる」と仰せになつたのは、仏法を何度も何度もしっかりと聞き味わひを深め、その度に仏のお慈悲に気づかされながら、信心を得る身になれるということでした。ただ浄土真宗という教えを信じることだけが信心なのではなく、「聞信」が大事なのです。

そして、次の二句には、諸仏称讃といわれるところが出てきます。



# 浄土真宗 新 仏事のイロハ

## 四、法要・行事

### ― 仏縁を深めよう ―

#### 「彼岸の意味」

#### お彼岸は「お墓参り」の期間？

お彼岸になると、本山をはじめ全国の佛寺で「彼岸会」が勤まります。大勢の門徒さんがお参りされることはいうまでもありませんが、その一方で、こうしたお寺での法要には関心を示さず、自分たちの先祖のお墓に参りさえすればよいと思っっている方も多いようです。先日、ある門徒に「彼岸会には、ぜひお参りください」と声をかけたら、「いやあ、その日はお墓参りしようと思っっていますので、失礼させていただきます」との返事。どうやら、お寺の法要よりも、お墓参りの方を大事に思っっておられるようです。

しかし、お彼岸の意味からすれば、今生きている「私」が仏法を聞かせていただくなくてはなりません。

お彼岸は、ご承知のように年に二回、春分と秋分の日（お中日）を以てさんで、前後一週間ずつあります。この期間は、実は、仏道修行のためには設けられたものです。本来ならば、毎日修めなければならぬ仏道ですが、ついなまけがちになるところから、「せめて季節のよいこの時期だけでも」と設けられた日本独特の仏教行事なのです。また、浄土教がさかんになると、西方に沈む夕日を眺めて、浄土に想いを馳せるようになるようになりました。



「彼岸」とは、迷いの世界を「彼岸」というのに対して、さとりの世界を表す言葉で、お彼岸とか彼岸会という場合の「彼岸」は「到彼岸」の略、つまり「迷いの世界からさとの世界へ到る道の実践」を意味します。

浄土真宗では、さとりになるための修行はせず、また、日々のお念仏の味わいが重要なのですが、このお彼岸の期間を「さとりの世界（浄土）へ到らしめてくださる阿彌陀さまのお徳を讃え、そのお心を聴聞させていただく仏縁」として大切にしています。

「彼岸」は「あの世」とイコールではありません。「迷いの世界である」あの世に「いる故人を慰める」のではなく、「真実の世界である浄土に生まれた故人を偲びつつ、自分自身がその浄土へ到る道であるお念仏の教えに耳を傾ける」ご縁の期間であり、法要なのです。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より

### 年忌法要表

1周忌	2023(令和 5)年	23回忌	2002(平成14)年
3回忌	2022(令和 4)年	25回忌	2000(平成12)年
7回忌	2018(平成30)年	27回忌	1998(平成10)年
13回忌	2012(平成24)年	33回忌	1992(平成 4)年
17回忌	2008(平成20)年	50回忌	1975(昭和50)年

### 編集後記

毎月、門信徒へお届けしていた寺報ですが、前号をもちまして一旦発送を止めました。今まで通り、毎月の発行は続けていきますが、まとめて年二回のお届けになります。◆これからは、毎月、ホームページにあげていくことだけに、発送に追われることは減りますが、怠けないようにしたいです。